

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲	第	号
------	-----	---	---

氏 名 岡田 典隆

論 文 題 目

Valve Selection for the Aortic Position in Dialysis Patients

(慢性透析患者に対する大動脈弁位の人工弁選択に関する考察)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委 員

松下 正 


名古屋大学教授

委 員

室原 豊明 

名古屋大学教授

委 員

古森 公浩 

名古屋大学教授

指導教授

碓氷 章彦 

論文審査の結果の要旨

今回、大動脈弁置換術を施行した透析患者及び非透析患者の遠隔成績を解析することにより、透析患者の弁関連イベントを明らかにするとともに、非透析患者と同様の年齢基準で弁種選択することの妥当性を示した。高齢者に生体弁を適応することにより、弁種が出血イベントに与えるリスクを同程度にするとともに、生体弁劣化回避率よりも不良な生存率を示す年齢群で生体弁を適切に選択してきたことが示された。加えて、透析患者内でもとりわけ、糖尿病性腎症、冠動脈疾患合併例の生命予後が極めて不良あることが示され、これらハイリスク群には年齢に関わらずに生体弁の適応を考慮されうるとした。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 心臓弁手術後の出血イベントとはガイドラインで明確に定義され、死亡、入院治療、後遺障害、あるいは輸血療法を要した、内的・外的出血エピソードのうち大手術や大きな外傷によるものを除いたものとされている。輸血量は問わない。とりわけ透析患者では出血イベントを繰り返すことが多いため、年間発生率では透析患者の出血イベントの高さが際立った（15.5%/年・人 vs. 2.9%/年・人、 $P<0.001$ ）。その内容は消化管出血が最多であり、脳出血がそれに続いた。
2. 今回のデータから、手術施行時点での大動脈弁の石灰化を定量することは困難であるが、手術適応とされた病変が狭窄の無い閉鎖不全症か、狭窄症が主病変かの2群に分けて、間接的に石灰化の程度を反映させた解析を行ったところ、術後の生命予後に差を認めなかった。その背景因子においても生命予後に影響する、糖尿病の有無、冠動脈疾患の有無について差を認めなかった。
3. 大動脈弁においては、透析患者は非透析患者に比較し、約2から3倍の進行速度で狭窄症が進行することが知られている。生体弁においても同様の病理学的変化が及ぶとすれば、生体弁劣化の速度も同様に2、3倍加速すると考えられる。術後2、3年程度で急速に劣化が進行する症例が時に存在することも事実であり、今回の検討ではこのような生体弁の早期劣化を来すリスク因子を算出することはイベント数が少なく困難であり、今後の課題である。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	岡田 典隆
試験担当者	主査 北と 空原豊明 古森公浩 指導教授 碓氷章彦			
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 透析患者の高い出血イベントについて 2. 手術時点の石灰化の程度が予後に及ぼす影響 3. 透析患者の生体弁早期劣化について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、心臓外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				